

# 眞 生

第九卷 第二號

□人間に若し理想と云ふものがあるならばそれは必ず日常の生活にまで及べられはならぬと思ひます。そしてまた日常の生活が少しでも楽しい生活、向上の生活がしたいならばそこには一つの理想と云ふものがなくてはなりません。

□此の意味に於て私共の生活は常に一つの理想を生み、そして其の理想はまた必ずその人の日常の生活にまで歸つて來るのが本當の理想であります。

□然は私共の理想とはどんな理想でなくてはなりませんまいか、實際の生活にまで及んだ理想とはどんな理想でありませう。それは言ふまでもなく、私共の身心の完全なる發達を目的とするものでなくてはならぬことばもとよりであります。

□ところが其の身心の完全な發達と云ふことがまた何の必要あつてそれを爲すかと申しますればそれはたゞ私共の身心の要求であるからと云ふ外に云ひやうはないやうです。

□乍然その本心の要求が身心の發達にあることは云ふまでもないこととして、然はその身心の發達とは一体どうなることであるかと更にその根底を尋ねてまゐりますれば、それは正しく身体の健康と精神の發達であります。

□そして身体の健康とは肉体の健全であると同時に其の肉体が心の會するところに従つて自由に活動のできることです。そして精神の發達とは私共の心が天地の公道に一致して自他共に生きるの道であります。

□人はいかなる場合にも自分獨りでは生存することができません。人と共に社會と共に各自の自由を尊重して、互に相助け援けて生くるのが眞實の相であります。私達に智情意の三面の働きがありますのもその爲めです。(念)

# 自 分 と 仕 事 と 金

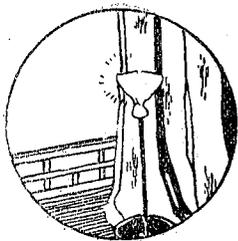
## 目 次

御 興	尅 子
自分と仕事と金	尅 子
時代と宗教	土屋 觀道
禪僧の思い出	土屋 觀道
眞生別時修養會感想	藤村長四郎
和 歌	松井長之助
最後の一日	南 久 生
吾朋便り	

## 御 興

- 今迄は、皆、「宗教」といふ御興を擔いで躍つて來ました。
- 個人は個人で自己慰安、自己陶醉をやつて來たし、寺は寺、教會は教會で、それを職業にして來たし、本山は本山、教派は教派でそれを金儲けの材料にして來たし、或一派或一部の英雄的野心家は、それを利用して勢力擴張、封建的專制を行ふ爲めの補助にして來ました。
- 餘程既成宗教を否定したつもりでも、矢張り其時代を都合よく代辯せざるが爲めに組織を換へた丈の宗教であつて、宗教そのものの原理から、其時代をも活かして行く宗教になつて居らぬことを感じます。宗教が手段になつてゐて、宗教そのものが第一義になつて居りません。
- 人間が佛へ仕へてゐるのでなく、佛が人間へ仕へてゐるのであり、宗教が宗派を造つてゐるのでなく、宗派が「宗教」を造つて居ります。
- かかる「宗教」は「宗教」以外に居る者から破らるべきであります。何故かといふは水の中に居る魚は、自ら水を汲み乾したら自分の死になる危険をよく知つてゐるからです。故に常に新宗教が、「宗教」以外の地面より生えて、既成「宗教」を併呑して行つて了ひます。今や固型化した「宗教」を覺醒せようとして新興階級として無産思想が隆起して來ました。
- 「宗教」の中に眠る「宗教」家は、これをコワイものとして眼を覆ひ、耳を覆つて逃げ廻つて居ります。何を怖れて近寄らないのか、それが自己自身の存立すべき根本原理であつて、これを痛く感ずるのは、自分が既に病身になつてゐる證據なんです。
- 今や「宗教」の殻を脱ぎ捨てて「人間」となるべきです。裸の儘、素手の儘で如來に活かされる「如來人」になるべきであります。(尅)

- 私は左腕を机に掛けて原稿紙とペンとを引寄せました。フト氣がつくと、私の心臓の鼓動がピリンピリンと机を揺ごかして、机の上のインキ壺のインキが、その度に、微かに振へて居ります。
- オヤと、氣をつけてよく見ると、一鼓動一鼓動規則正しく、インキが波打つて居ります。こりや面白いとよく見てゐると、ますます明らかに波打つ。此の小さい心臓の鼓動が、大きい机全体を動かして、その上に在るインキ壺まで揺すつてゐる事を思ふと、皆の物か一つ脈を打つてゐるように思へます。
- 生きてゐる私は、矢張り宇宙の中心よりの鼓動を傳へて、今生きてゐるのでした。私の中には宇宙の大中心から送り出された血潮が今循環つてゐます。そして天地と共に生命を一つにし、天地と共に脈搏を一つにし天地と共に呼吸を一つにしてゐるのでした。實際自分で自分の脈をよく量つて見ると、本當に宇宙と一体になつてゐるのでした。何といふ自分は偉大なるものでせう、何といふ自分は尊嚴なるものでせう。宇宙の意志を爰に代表して、自分は生きてゐるのでした。天地の働きを、一身に集めて茲に現はしてゐるのでした。
- うごん屋をやつてゐても、八百屋をやつてゐても、たゞ生活に峩々として、愚痴を答し乍ら働いてゐるのではありませんでした。金は生活の糧として儲けるのです、金を儲けた丈で「儲け」が終つたのではありません。金と共に眞に「自己の價値」を儲け出して行く、此の「儲け」が儲け出されて行くとき、金も「金」以上に尊い有難いものでした。金を穢れたもの、汚ない物と云ふのは、尊い美しい物になし得ない衷心の信仰がないからであります。
- 仕事と自分と金とが一つになつて働いてゆく時、そこに本當の生活と信仰とがあります。自分が此の天地の精氣に孕まれて元氣で働く、その時その仕事が生きて、仕事が生きてと涉るから自然に金が儲つて、其金が又活きた途へごんごん費はれてゆく、そしてお金も尊い立派な働きをして行つて呉れます。お金は決して賤しむべき、けなすべきものでなくて、天地の意氣を感じて大變な仕事をして呉れる第二の人間です。
- 我々は如來の「み心」を享けて、此の仕事と自分が一つになり、金と自分が一つになつて、其の「み榮へ」を現はさねばならぬと思ひます。(尅子)



# 時代と宗教

土屋 觀道

(以下の文はこの一月一日芝増上寺の道友先輩の中で述べた大要であります。)

## 一、宗乗と信仰

□私は中年にして僧侶となつたものではありませんが、初めから浄土宗でなくてはならぬと云ふので信仰を求めたものではありません。たゞ私自身に求むる一つの問題があつて、之を解決すべく、色々の宗教に求めて、遂に入つたのが浄土宗でありました。

□従つて私の求めたのは今日の浄土宗でもなければ、それかと云つて法然上人の宗教でもなかつたのであります。たゞ私の自ら求むるものを求めて、その解決を得たのが法然上人の信仰であつたと云ふに過ぎません。

□而も、其の信仰と申しましてもそれはたゞ私の求むるものを解決して頂いた点に於て、宗祖の法語が私を救つたので、それ以外の宗祖の法語までがそれを救つたと云ふのではないのです。乍然、私の信仰は其後二十年昔も今も尙一貫して今日あらしめてゐることは全く此の宗祖の御力によることと信じて居ります。

□乍然こゝに一つの憂ゆ可きことは其の後宗祖の法語を研究し、併せて宗門の教學を學ぶに至つて、私の信仰はそれらの總べてまでが信せねばならぬとすると、可なりに困るものゝあることを感ずるやうになつたことです。乍然諸君之は私の間違でありませうか。

□此の点は口にご現はに云ふ人はないのでありますが、我が宗門の中にも可なりに多いではないかと思ふのであります。また、此のことは特に現代の若き人々に多いかの感じがします。

□それも私一人として見れば私の信仰は主として、宗祖の法語の中に私の生く可き信仰の道を見出してゐる限り、その他の点に於て私の信仰が他の人とどう違はうとかまつた事ではありませんが、今日學ぶところの浄土宗の宗乗なるものと私其の信仰とが違ふと云ふことはそれを宗門の人として見たときは決して面白いことではないのであります。

□而も私がわざわざこのことをこゝに申しますのは徒に私の所感をこゝに發表せんが爲めではありません。それはひとへに私と同じ感じの人も我が宗門の内に多いことかと思ふと同時に、かゝる考への人々が今後自分をいかに所置して行く可きかを先覺の師に其の指導を仰がうと思ふからであります。

□而も此のことは單に今日の我が宗門人ばかりでなく、恐らくは殆ど既成宗教のすべてに於てあることではないかと思はれるのであります。宗門以外の未信者の人々には一層此の感が強いではないかとさへ思へるのであります。

□それは何故かと申しますれば昔と今とは其の時代に於て社會の思想と生活とが非常な相違であるからであります。従て、いかなる人と雖も其の時代に生存する限り、寸毫も時代思想の影響を受けぬと云ふことはあり得ないことと思ふのであります。

□従つて七百年昔の法然上人と七百年以後の今日の我々と其の思想と生活とを悉く同じに仕やうと云ふ事は少くとも上人の時代と今日が違つてゐる限り、それは殆ど不可能な事かと思ふのであります。

□加之、之を昔に比ぶれば時代は確に進んでゐます。そしてまた、社會の組織も昔とは變つてゐます。而もかゝる時代に私共のみ七百年の昔のやうな思想と信仰にあれど云ふことはそれは全く私共の生活を殺すものであつて、決して眞に時代を救ふ所以ではありませんまい。

□否、それも私共が宗門人であるからと云ふので、さうあらねばならぬと云ふなら、それも辛抱してさうあることもできませう。乍然現代の社會まで、果してそれによつて指導せらるゝかは大いなる問題でありませう。否、それどころか、いつまでも私共にそんな考へがあるならば時代は之をふり向きもせずして、私共を置き去りにすることでありませう。

□少くとも現代の青年はそんなことには何等の關心を持たぬのが今日の有様であります。否さう云ふ考へを捨てるのを以つて、本當に生きる道とさへ考へるのが今日の青年であります。従つて今日の青年は今や自らの生きる道の外何ものも要せぬと云ふのが今日の大勢であります。

## 二、根本佛教と淨土教

□それについて尙一つの問題は本根佛教と淨土教との關係であります。私共が昔學校に於て學んだところは本根佛教とか元始佛教とか云ふものが今日ほどは盛んではありませんでした。而も從來の教へとしては宗祖中心の研究と云ふよりも二祖三代と云ふ宗學中心の淨土教が一つの宗學として既成的に教へられたものであります。

□然に此の淨土宗學なるものは主として封建時代に完成したものであります爲めに、其の時代の布教上其の教義と云ふものも知らず知らずに其の時代に適すべく影響せられて來た点があります。其の爲めに當時と非常に時代を異にする今日に於てはそれが反つて今日の社會生活には一致しがたいものがあると思はれる点もないではありません。

□然に近頃の根本佛教若くは元始佛教の研究に就て之を見るに、悉くがさうであると云ふのではありませんが、少くとも其の研究が新しいだけに、從來の佛説ならざる部分を佛説から分離して純粹釋尊の教へに近いものを明にするの感があります。

□そして、其の結果として選ばれたものが、今日の多くの社會に發表せられるに至りましたが、それによれば私達にもそれが釋尊の佛説であらうと思はれると同時に、而もその説がまた現代の社會生活にも反つて從來の既成佛教よりも多くの点に於て社會性と合理性を持つてゐるかに考へられるものも多いのであります。

□して見ると、此の際に於ける元始佛教とか根本佛教と今日の既成宗乘と相一致なる点はもとより論ずる必要もないのであります。其の相違し、矛盾するやうな点があつたとしたならば其の時私たちはその何れをとる可きでありませうか。

□尤もかゝる際に於ても、從來の淨土宗學が根本佛教の説くところと一致しなくても、それが今日の社會に於て、多くの社會性と合理性を持つてゐるならば私共はあえて之を探ることに決して躊躇するものではありません。乍然それが反つて根本佛教若くは元始佛教の方面に多くの正しさを持つと思はれるとき、私共宗門一般はそれらに對して無關心であつてよいでありませうか。

□此の点に於て、近頃の多くの青年若くは有識階級はともすれば從來のやうな既成教團や既成宗學を離れて、全々獨立に根本佛教若くは元始佛教により釋尊を通して人生の眞意義を見出さうとするのが多いのであります。道友の先輩諸彦には此の点に對してさう云ふ所見と抱負とをお持ちでありませう。

## 三、布教の仕方と現代人の要求

□次に私の宗門布教に於て一つの憂いとすることは、今までの多くの布教家はともすればあまりに従

來の宗義に捕はれて、眞實の信仰を傳えることを忘れてゐるのではないかと思はれる点であります。

□之は主として現代人の心を私共が充分に知らないが爲めでもあり、また一面には私共自らに眞實の信仰を求めないからにもよる。そしてまた、そこには説く人と聽く人との生活の相違もあるかと思ふのであります。

□現代人の要求は私の思ふところでは決して、淨土宗とか眞宗とか或は基督教とか佛教とかさうした既成宗教を求めてゐるのではありません。彼等はたゞ偏へに自らの生くるところを求めて止まぬものであります。

□だから、今日の人々はすべての理論と云ふよりも先づ自らに生るの道を求めてゐるのであります。従つてそれを與えるものが天理教であるなら天理教でもよく、金光教であるならば金光教でもよく、決して何宗でなくてはならぬとは思つてゐないのであります。

□かうした事情から、今日の人々は色々の理窟より、實際の生活に欠けてゐる自分の不足をそれによつて補はうとしてゐるのが事實であります。此の点に於て現代人の欲求する宗教は力なきものへの救いと、之を實現の力であります。

□然に此の点に於て從來の布教は可なりに反省すべきものがないでせうか。私は宗門の一人である限り、宗祖を中心とし念佛を根本とする点に於て、決して愛宗の念に欠けてゐるものではないと思ふのであります。だからかうしたことまで反省せずにはゐられないのであります。之は一体どうすればよいのでありませう。

□此の点は少くとも私共の大に反省すべき所であつて、少くとも今日の多くの民衆は自分に生くる道を求めてゐるのであつて、決して單なる一宗一派を求めてゐるのではないのであります。

□此の意味に於て、從來の宗乘が現代人の心の中にどれだけ本當に入りつゝあるか、またそれによつ

て、本當の宗乘がどれだけ多くの人を生かしつゝあるかは疑問であります。此のことは特に私共一般僧侶として、少くとも深く反省すべきことでありませう。

□かく云へばとて、私は徒に時代に迎合して、其の時代の思想の奴隷となれと云ふのではありませぬ。乍然いかにそれが立派な思想であり信仰でありまして、實際の社會と没交渉でありましては、それは決して生ける思想でもなければ信仰でもないものでありまして、それでは眞實の宗教とはならぬかと思ふのであります。

□従つて、此の意味に於て今日の布教は今少しく實際の社會生活と深き關係を持つべきであり、而もそれが宗門の根本精神として、現代を指導し、現代を理想化するものでなくてはならぬかと思ふのであります。今日の宗門の布教は果してその点に於て遺憾無しでありませうか。

#### 四、道德觀念の相違について

□第三には道德觀念の相違であります。善は爲すべし惡は爲す可からずとは昔も今も變らざる眞理に相違ありません。乍然ごんなものが善であり、惡であるか云ふことになりまして、昔の善必ずしも今日の善ではなく昔の惡必ずしも今日の惡ではないものがあります。

□之は主として、時代の變化によつて、自然とさうなつて來るものであると思ひますが、それが今日のような時代の變遷期におきましては一層甚しいのではないかと思ふのであります。そしてまた其の中には未だ善惡の區分さへ判然せぬものもありませう。

□ところが、更に一つの困つたことは社會階級の對立の上にて來た、道德觀念の相違であります。即ち自由主義的な資本主義の上に現はれてゐる道德觀念と民衆社會の生活を中心とする社會主義の上に現はれる道德觀念の相違であります。

□そして、此のことは己に實際の社會に於ては一つの大きいなる闘争の中軸を爲すものであつて、社會の大勢は己にいかんとも仕がたいものがあります。然るところ、今日の佛教徒は之に對していかなる態度をとるべきでありませう。

□此の点に於て、從來の佛教徒は多くの場合有産家に都合のよい教へでありました。従つて多くの民衆は殆ど佛教の信者であつたにかゝらず、それらの多くは自分の都合と云ふよりも有産階級の人々に都合よいやうな、思想と信仰との上に訓らされてゐたのであります。

□乍然、今日の社會は今やそれでは立行かなくなりました。従つて多くの民衆は今やさうした意味での一切の宗教を捨て、正しく自らに生く可き多くの道徳と哲學と宗教とを求めて來たのであります。此の意味に於て、從來の佛教が今日の一般民衆の上に於てあまりに歓迎せられぬのも亦無理からぬことであります。

□否、それどころか、今日の多くの民衆はそれの爲めに反つて永い間の幸福を失ひ、眞實に生く可き理想さへも充分に立てることができなかつた感さへもあるものであります。

□乍然、今や時代は非常な長足の進歩を爲して、一般民衆の社會的自覺は到底このまゝには止まる可くもありません。そしてあまりにも封建的に、また資本家にのみ都合よく説かれて來た從來の佛教はそれの爲めに今や民衆の心から振り捨てられやうとさへせられて來たのであります。

□私は此の意味に於て今後の佛教は今少しく眞實の目醒めを要するではないかと思ふのであります。そして佛教の理想が社會民衆の自覺を促して、社會全体の上にあることは云ふまでもないことであります。が、それらの理窟は暫く別として、今日の實際生活に於て從來の布教家がその何れに立つ可きかは大に反省すべきものではないでせうか。

いさゝか私の所感を述べて先覺の教へを待つ所以であります。(三〇・二、一二、名古屋にて追憶)

## 禪僧の思ひ出

土屋觀道

□法然上人は二十六年の求道の結果、遂に聖道門を捨て、淨土門に歸せられたと云ふことであるが、それは聖道自力の法門は到底吾等如きの凡夫の行として行いようところのものではないからと云ふにある。

□然にそれにもかゝらず、私には青年時代から禪宗が好きでならなかつた。青年と云つてもまだ二十歳前後だ、もとより禪の何ものたるかも知らなかつた頃からである。乍然それにもかゝらず私が禪が好きになつた云ふことはおかしなことだが、今から考へればそれは全く禪宗の坊さんが好きだつたのである。

□それも、主として禪僧の姿が好きだつた、殊に世間の事柄に超然として、何ものにも捕はれないと云つたやうな、萬事此の世を超越したと云ふあの禪風の相が好きだつたやうである。

□そのくせ私にはそのやうな生活はできなかつた。否それどころか、一面には寧ろそれよりも此の世の事が忘れられずに、此の世の生活がしたかつた。而もそれにもかゝらずさうしたものかかうした禪風の生活を心から慕

ふ何者かのあることを否むわけには行かなかつた。

□乍然世によく云ふ極端から極端に走ると云ふことはこゝにもそれが現はれてゐるとも云へる。萬事を自ら裁いて自由にありたいと思つた私にはそれが出來ないで念佛に歸したものの、其の結果はさうかと云へばやはり眞の自由を得たいが爲めである。

□而も其の結果が念佛だ、念佛はまことに自分の力を否定して、一切を如來に投ずることである。而もそれによつて一切か自由となり、そこに眞實の解脱があり、成佛がある。然に禪は初めからその生活をやるのだ。即ち即身即佛である。この心が之佛と云ふのだ。

□して見ると念佛の理想と禪の生活とは其の最後の理想に於ては決して異つたものでない、而も禪は其の結果であり、理想である。然に私が念佛を愛し乍ら、其の禪を愛すると云ふことは其の結果に於て決して矛盾したことでもなく、又間違つたことでもない。

□此の意味に於て私が念佛の信者であり乍らその禪の生活を忘るゝこのできないと云ふことは亦無理もないことである。

□乍然、私が本當に禪が好きになつたのはかうした理由からではなくして、その實は禪僧の姿が何となく私の心に好きになつたからである。それも殊更に私の心を動したものは私が九州の福岡工業の學校時代に崇福寺の貫主東藏禪師の禪風を見るに至つてからである。

□それもまだ私が二十才前後の時であつた。全く佛教の何ものたるかも知らない私であつたが、計らずも師の寺に於て校友の亡靈を吊ふときに初めて此の禪僧を見たに始まる。

□而も私は未だ一度も此の禪僧に面會したと云ふわけではない、たゞ遠くから此の禪僧の風貌に接したに過ぎないのだ、尤もその禪師のことについては二三名僧としての逸話を面白く聞かされたことはある。

□禪師は近代にない名僧である。一切の名譽や金錢にとん着なく、肉食もせられず妻帯もない、全く此の世を離れたる名僧であると。

□又こうしたうわさも聞いた、禪師はいつも托鉢に出る時は二三の小僧を伴につれ、自ら知らざる如くである。雨の降る日や風の日も、それを厭ふやうな方ではない、而も風の強い日は小供がそれに吹き飛ばされぬやうにとて小供の腰から細ひもで自分の腰に結びつけられて托

鉢に出られるさうであると。

□又こんな話も聞いた。禪師は一度禪定に入る時は二日でも三日でも禪定に入つたまゝである。時によると七日でも十日でも一食もしないで禪定の中にあると。そしてその爲めに禪師の下腹はあまりに力が入り過ぎて割れると云ふので鐵の輪が入れてあるのだと。

□奇を好む青年の常として、かうした話がされだけに私の心を動かしたことが知れない、そして當時の私にはいかにもそれが本當かに思へて、尊きそれが一つのおこかれであつた。私が一目見て此の禪師を敬慕して止まないのも亦當時の私としてはあたり前ではなかつたか。

□大きな脊丈に短い法衣は全く寒暑さへ凌ぐにさうかと思へる程度であつた。而も足は素足で足袋もなく袖と裾とは全く肱と膝とをつゝ出にやつとである。

□両の手はいつも胸のあたりに恰も座禪の時のやうに組まれ、首と体とが一直線に造りつけたやうに動かない姿をして、右の肩が少し身がまへでもしたかのやうに下つた態度で常に道を歩くのにも禪定の中にもあるかのやうだつた。

□眼は半眼にして常に何者かを冥想するか如く、見すえたまゝに少しも動かさず、此の世の現象界には全く用もないやうな姿であつた。それこそ全く此の世の事柄を一切

超越した態度である。

## 三

□殊に私の心に深く印象せられて今も尙その風采が心に留つてゐるのは禪師を市の公會堂で見たときの事であつた。其の日は何か佛教徒の大會でもあつたものか東京からは近角常觀氏なども見えられてゐた。時は明治の四十年頃の事かと思ふ。其の席で禪師が何か講演をせられた其の態度であつた。

□然しその話は何の話であつたかその話は其の時も今も私には一向判らない、それはあまりに聴衆がたくさんであつたのと、あまりにそれがさわがしかつたので多分禪師の話が充分聞えなかつたからにもよることであらう、乍然私の言はんとするところはそんなところにはない、それはたゞ其の時の禪師の風貌がいかにも大衆の中に超然として群を抜ぐものがあつたことである。

□禪師は何か全身をこめたやうな調子で自分の思ふ所を獨りで聲高く叫はれておつた、けれどもそれは恰も亡者に對する引導でも渡すのではないかと思はれるほゞに一切の聴衆を相手にするものであつた。而もそれがいかに禪風らしい人格高き高僧のおもかげであつた。

□聴衆の多くは禪師會場に出られた時、禪師が禪師だと云つて一般にそれに注目して敬意を表するものゝ如くさ

へ見えた。さうして禪師はそんなことには全く自分ではそれを知らない有様であつた。

□今一つはその後私が工業の學校を卒へて一時炭坑に奉職し、何にかの用事で歸郷しておつたとき、郷里に近い九州の久留米でその町の梅林寺と云ふ寺から福岡へ歸へられるのを其の途に見たことがある。

□而もその風相は全く旅僧のやうな身なりであつて、足袋もはかない割下駄の出立ちであつた。その時は私はまだ在家の身ではあつたが丁度出家したい熱に浮かされてゐた當時でもあつたので、そんなにそれをうらやんでおとから之を見送つたか知れない。

□以上は私が禪僧を好きになつた一つの大きな原因であるが其の後と雖も此の禪師がいかばかり私の爲めには道の先覺として私を指導してくれたか知れない。それこそ百萬の書を読むよりも、かうした眞の高徳に會ふことは私に於ては何よりの仕合である。(四、九、一七、一全二〇一七、再校)

因に此の禪師について母校の校長であつた杉本先生から聞か話があります。それは、

『或日一人の禪僧が學校を訪ねて校長に會いたいと云つた、聞けば崇福寺の主職であると、かねてえらい人だと聞いていたので之を引見すると、今度日本の三戒壇の

一である大宰府の戒壇を再建したいから、其の設計をしてくれ」とのことであつた。談が進んで建設費のことに及ぶと師自身で托鉢するとの事である。「それは大へんな事ではありませんか、當市には可なり金持ちもあることだから、寄附でも募つたらさうです」と云ふと、「いや近頃の寄附ほご人の心を濁すものはない、本當の信仰から出た金でない」と戒壇が汚れる、だから私の托鉢によつて之を建てたい」と。その決心の純潔なのに僕はすっかり頭が下つた。それから僕も本氣で此の人の爲めに微力を盡した。以來佛教の偉大なるものと云ふことも感ずるやうにもなつた。毎年あゝして崇福寺で教職員並に學友の亡靈を吊ふやうになつたのもそれからだつたのである。』と。

之は私が出家して後、久々で校長を神奈川の宿に訪ねたときの話でした。(當時校長は神奈川縣の工業學校長として來てゐられた)。(四、一〇、三〇、追記)

### 眞生別時修養會の感想

三重縣飯南郡大石第二小學校 藤村長四郎

私は幸福にも一月五日より三日間の眞生別時念佛修養

會に参加させて戴きました事を、心より深く感謝致します。私は此の短時日では御座るましたが其の間に私自身の心底に觸れ充ち満ちた心からの悦びを感謝しつゝ、感想を述べさせて戴きます。悲しい哉現在の世界は文化の進むに従つて狡猾となり横着となり怠惰になり薄情になり愛はいやが上にも薄れて次第々々に神佛に遠ざかりつゝあります。人多き其中に神佛の御旨を心こして人らしき生活を送る者が、開け行く世に次第に影を失ふ事實を見る時クリストの大愛を以てしても釋迦の慈悲を以てしても冷やかな知識萬能の現世を救ふ事の出来ぬかと思つては寂しくもあり心細くもあり哀愁極まつて只暗涙に袖を濡らさずには居られないのであります。たかの知れた人間お互が、貧弱な脳味噌を絞り上げた不確實な羅針盤を頼みとして船を進めたならばごんな彼岸に着くでありませう。波のまにまに迷ひ漂ひ、遂には暗礁に乗り上げて破船の憂き目に遭遇する事でありませう。さうすれば如何なるものを目標とすべきか？ 語らずと知れた如來の大きなみ恵み、豊なる大愛にひたつてこそ私共は明るい幸福な生活が出来るのです。お互が眞の信仰生活を營む事その事でありませう。眞實の宗教たる各自をして神の心と一体たらしめ、佛の心と不二たらしむるこそ眞實の宗教であります。お互私共の日々の小さき歩みが神の國佛

の道への一步々々であらしめ度い、これこそ本當に私共の祈であります。信仰生活の階級として此の恵み與へられた三日間の別時念佛會こそ弱き私共に明るい根強い信仰への暗示を與へて下さつた聊なりとも宇宙の大生命に觸れさせて戴いた。飯命の態度を惠んで下さつた事其の事を厚く心より有難く思ひます。お互に實行實働の汗と精進苦行の涙とに依つて眞の信仰に入れさせて頂かう。終に導師中野先生及主催谷口様に感謝します。

(うらゝ、かなミオヤの慈光を身に受けて、一、一四夜記 合掌)

### 不動院お別時

大石村 松井長之助

慈悲ふがき如來の御手に引かれつ、  
集り會すおなじ兄弟

朝まだき庭にならびて体操よ  
佛さちかき小兒さかへり  
いそがしく仕事すませて馳けこみの  
念佛三昧戀じき故に

御六字の淨き鏡にうつり出る  
われの姿の愧かしきかも

### 最後の一日

南 久生

生れながらに氣まゝに育つた私は、何一つ不自由無く十八の春を迎へた。両親が汝は体は大きく成つても幼い時と少しも變りが無いと常に心配をかけて居た。それにも關はらず、尙一層氣まゝが増すばかりだ、この上は信仰にたよれ等と度々聞かされた。私にも少しばかりは善心が有つたのか聞かされる度毎に自分はなせ氣まゝなだらう、この氣まゝがなほるだらうか等と、淋しい感に打れたそれも一時の感に過ぎなかつた。

然るに一月五日六日七日の別時會も、前から両親又某君に入會を奨められ、否責められていやゝながら参加した。第一日目第二日目も義務的にすました。最後の日

か来た。今日一日です、一心にやりませう、と言はれた。の非行を思ひ出し、あゝ自分が悪かつたと心の中に改悔時、何としたのか自分ながら不思議にも急に今迄の自分を誓つた。それと同時に涙がほゝを傳つて流れて居た。

### 吾朋便り

津島 中野善英様より

三四ヶ月一寸も見なかつた中外日報を二三日整理して一月分から讀みかけて見ました。そして中外誌上にて非常に氣分の變つてゐる事に驚きました。三四ヶ月の中にもコロンナに變るものか全く驚きました。御聡かしい事で御座います。新興階級から既成宗教へ排撃的態度が濃厚になつて來た事を中外が代表して表示して居ります。かゝる反宗教的、宗教否定的態度は今後益々加速度的に加はつて來るでせうが、それは一方に低級な錯覺的宗教を破壊する事に効があつて嬉しい事です、それと共に半可通に宗教そのもの、内容と生命までが誤解され願みら

れない事が生ずるであらうが、その一點だけは屹度惜しむ可き事であらうと思ひます。

封建的資本主義化した概念と、形式の宗教には私初め反對ですが、宗教の無い機械化した唯物主義の人間と、社會の形成には同意する事は出来ません。宗教こそ労働の原理であつて、宗教こそ生活の根本本質であると思ひます。殊更ら「宗教」といふものを逃がらざるをコワがつて抱へ込むのではなく、宗教になつて生活であり、本當の生活となつてソレヲ宗教といふのだと思ひます。だから資本階級や労働階級だけに提灯持ちする宗教でなく全一的に萬人全社會が廻つて行く爲めに本當の宗教が世に現はれて來ればならぬと思ひます。

而し爰しばらくは反動思想として労働階級に都合のよい、よゝな宗教が綱出され舊來のブル傾向の既成宗教は苦境に立ち

益々崩壊してゆくであらうと思ひます。

それと共に私達は既成宗教の派生位に誤解せられて此等反動的過渡的「反宗教運動」と戰つて行かんらぬと思ひます。それが爲めに私共は益々深く大生命界へ歸命するところあつて、此の深い念佛の底から全歸命の内容を以て、現實生活に出ぬならぬと思ひます。

今迄の宗教は余りに觀念の一方に傾きすぎました。それと共に今後は反觀念主義の物質主義萬能に陥るであらうから、そのいづれの一方にも墮せず、深き「生きる原理」から直ちにパンの問題に出でる、眞實宗教の体験がなくてはいかぬと思ひます。

それには自らが商賣やる位いの實生活相がなくてはいかぬと思ひます。而し又余りに商賣人になると表面的應用原理には詳しくなるが根本原理の研究としての歸命体験に時處の上からも浮薄になり勝

ちになるだらうから所謂「専門家」としての「宗教原理探求」が又一方に必要だらうと思ひます。だから自分が今すぐ眞似て商賣人になる必要はなく、自分は自分として此等實際的應用原理の体験者である實業家と相提契して、兩々相敬へ相通じ合つて各々充實し全社會的にも綜合統一して行きたいと思ひます。

藤村草様より

久方ぶりの各地御傳導にてさぞかし御つかれ遊ばしました事を存じ上ます。源彌死去の際より早く御尊顏に接したく存じ居りました。一念が通じましたか思ひがけず五七日に御光來頂くこの御知らせ彌よ見ばかりでなくお前にも御上人様がはるゝ御越し頂けるのですよと御佛前にて申た事で御座いました。御上人様との今世の縁もわすかの年月ながら幾十年たつともあれ以上にはと思つてばかり二人とも身も心もさげ御したい申上て居りました。御上人様もまた思つて頂いて居りました事を存じます。親の意志をつぐは普通ですが、子供の爲に信仰にみち

ひかれ二人の愛する子を失つても平常を失わず信仰に益々精進させて頂けるのを考へました時、大なる親孝行と思わずにも居られせん。世に子を失ふほどの者は悲慘中の悲慘と申傳へられて居りますが、私共は此悲慘にさへ堪へられるほどの信念が得られました事を体験いたしましたので、何事が來ることも恐るゝ時はないと安らかな心持を得ました事は全く尊き恩寵と感謝いたして居ります。殊に親籐の者が此度の御上人様の御講話を拜聴させて頂きまして信仰に目ざめしたのも亡き源彌の引合せかどうれしく存じて居ります。何分御見捨てなく此後とも御指導頂きますようお願いの上です。

秋田市 石黒國夫様より

最近御發表になつた「故郷を訪ぬるの記」は非常に感激に満たされ乍ら讀みました。別してあの後の方が私の心を打つてくれました。

私には御上人様の本當のお相がはつきり掴み得たかの様な心持が致します。

「若しも私に故郷に錦を着て歸れと云ふ人があるならばこの吾を見よ」と。

御上人様私は最近何んだか意氣地が無くなつたやうに思へてなりません。何處に向つてもあまり無理が云へなくなつてしまひましたと云ふのは、私には世の中の出來事が皆仕方がないもの、やうに思へてなりません。ありのまゝ、認めてゆきたいのです。

親を殺せばならぬ程不幸なものはないと存じます。又子を捨てればならぬ程不幸なものはないと思ひます。罪を犯さずにはあらぬ人々、本當に私は氣の毒に思ひます。どうしてその人達のみ責めることが出来るでせうか。誰しも皆、幸福を希み樂しく生きんことを望んでゐるものと思ひます。それなのに何故にかくも一部の人々に限られて罪を犯し、又暗い道を生ればならぬのでせうか。

御上人様、私は今その人々の罪の責任を私自身の上に幾何感せずにはあらねなくなりましたのです。善人振つてゐる人々それが私には悪魔の姿となつて追つてきます。

御上人様、私は昨年十月から一人の子の親となりました。如來様は私に別な

世界を興へてくれました。その爲めに色々のことを勉強致しました。子供をチツト見てゐると何きはなしに考へずにはゐられなくなりませう。そうだとつゞく正しく生きる事です。子供が可愛いかつたら自身の欠点を直す事です。罪の子よ私の不徳をウソと責めてくれと心の中で叫んでゐます。

私は今銀行の都合で秋田市に出張してゐます。出張先の家では元かなり手廣く商業をやつてゐたのですが、四五年來の不景氣ですつかり財産を失ひました。主人は小説のやうな來歴を持つてゐる人です。出張來私の木魚の音に主人も閻々の情を木魚の音にかきけすやうになりました。

正しき道、それは何處に求めても正しき道である云ふこと、今一つは眞生教理がいかに現代人の求めつゝある宗教であるかを痛切に知りました。

□土屋觀道

○皆様には御變りもないでせうか、新年には色々の御便りを受けたにか、わらす、そのなりで失禮したこともありません。

各々その集りのこと、いつにも勝る喜びの集りでした。かうだからやはり出なければならぬのだと、一面には限りない喜びに充たされたが、またそれだけに其の他の道友の方々も御訪れしたい心が一層に盛に起つてなりました。

○其の後東京でも急しく殆ど何をやつたか判らないほどでありましたが、去る六日の夜から名古屋に來て椎尾先生の代議士候補の應援に忙殺されて居ます。殊に毎晩六七回の會場に出席して殆ど息もつかないやうな先生の御急かじさを見ては私共までちつとして居られない心がします。此のころ正に先生には奮戰奮闘の一大活劇であります。その正見と云いその主張と云い正に宇宙生命の現はれかと思はれます。そしてまたその爲めでもありませう、應援の弁士も全く自己を忘れて先生の爲めに専心活動して止まないのは之全く喜びの限りであります。毎日私は崇徳寺様で御宿を願つて居りますが、こゝでも眞生の同士が集つて先生の爲めにその應援を計つてゐます。

すが、心安だてのつもりで失禮したかたもありますので惡からす御許しのほどをお願いいたします。

○次に私共一家には昨冬以來殆ど風邪も引かないで皆が丈夫でありますから、乍他事御安心下さい。何が幸いし申しても一家が陸じく平和で丈夫なほど仕合はないかと思ひます。それが一同揃つて如來の御前に念佛して、歳を迎えらる云ふことは此の上もない感謝の生活であります。

○次に先月十六、七、八日の三日間は宗門の信仰會議に寄せて頂きました。之は浄土宗務所の主催でありましたが集る人達は金田、岩井、桑門の老宿と望月、椎尾、矢吹の三博士、笹本、藤本、熊野の三先輩、並に渡邊宗務執行と柴田教學部長と私の集りでした。此外百山の土川僧林彦明上人等も出席せらる可きでしたが病氣の爲めに欠席でした。議せられた事柄は主として、宗門信仰の統一と布教方針に對する相談でありましたが、豫想以上の平和の中に、一同會してその道が構ぜられたことは私の最も喜びとするところ

○私はその爲めに遂に心ならずも眞生の原稿を遅れざるを得なくなりました。そしてまた、各地に於ける御禮の御手紙も怠つてゐます。失禮の段は御許し下さい。今夜は當地の應援を終つてから、十一時の夜行で越后に行きます。柏崎の原吉郎氏が民政黨から立候補せられたからであります。

○私共は眞生の意義からして必しも政黨政派に屬するものではありません。そしてまたそれが今日のところ反つて結構な事かと思ふのであります。乍然それか云つて、今日のところまた各自の屬する政黨から立候補せらるゝことも決して悪いことではありません。それが自分の確心ある政見と政策とがあるならば私共はその人の人格を信じて之を應援しようと思ふのであります。我が眞生同盟の一員として、信仰の上から社會國家を眞に改造しやうと思ふ心があるならば私共はそれを衷心から推選せざるを得ないのであります。此の意味に於て我が眞生同盟の中から原氏御出になる云ふことは私共としては限らない喜びと望みと力

ろでありました。尤もその中には宗祖(法然上人)中心と云ふ立場からはどうかと思はれる二三の疑點もないではありませんでしたが、あゝした集りとしては又止むを得ないことでありませう。乍然その中でも私の信仰とその主張とが日頃の主張をそのまゝに述べられたにか、わらず、むしろそれこそは反つて眞の法然上人の心であるかに認められた一點は私自身に於ては可成りに強き誇りと喜びの一つでありました。此の點に於て、所謂私の光明主義、即ち私共を中心とする眞生運動は今後とも今までの通りで寸毫の訂正も補足の要せないことになりました。そしてまた、今後の浄土宗としても私共の信仰が更に充分に認められる時期があるかと思はれたとき、私の喜びは之を道友と共に喜びすばあられないものがあります。

○次に十九日には夜行で名古屋に立ちました。それから大阪、芦屋、尼ヶ崎、神戸、津、伊勢の大石、清水、焼津を経て歸京したのが二月の一日でした。此間僅に十日あまりでありましたが、各地とも

であります。

○それについても私の御願いは信仰を中心とするの集りでありませうから、ごまごまでも道友の心を以つて共に相接すること云ふことであります。従つて、たゞいそには政見を異にし政派を別にするものがありましても、決してその爲めに永遠の友たることを忘れぬことです。従つて私達は各々各人の政見と政策を重じ、國家の安穩と社會の平和を中心として、ごまごまでも相提携して行くこと云ふ充分の覺悟を初めから失はぬこと云ふことであります。

◎名古屋便り

當地では向上婦人會及眞生會の人達が婦人ばかりの弁論部を組織して椎尾先生の推薦演說會を毎日晝夜二回に渉りて各所で熱弁を振ふてゐます。婦人の方の弁論といふので大へん人氣を呼び各會場とも非常な盛會でした。中にも千歳町崇徳寺で十六日の晝開かれた時の如き本堂のお内陣まで開放せれば入りきれないやうな有様でした。(常生)

# 行基寺別時三昧會案内

時 三月二十五日午前五時開白  
 三月三十一日閉會  
 所 岐阜縣海津郡城山村 行基寺  
 (養老線美濃山崎驛下車約五丁)  
 導師 土屋 觀道 師

今年は例年よりも期日を早めました。どうぞ皆様御誘ひ合せ御隨喜下さいませ。

## 行 基 寺

### 誂代寄贈芳名

○五拾圓見附今井善吉様 ○拾圓大阪野田三郎様、全長岡中村祥作様、全大阪普我尾昌治様 ○六圓浦賀石井庄太郎様 ○五圓愛知角田俊善様、全東京小倉彦六様、全東京永松愛子様 ○參圓尼ヶ崎橋本信吉様、全浦賀黒岡仁太郎様、全台灣小笠原金亮様、全浦賀上阪伊之助様、全岐阜行基寺様、全靜岡法月光二様、全尼ヶ崎中島文吉様 ○貳圓博多井上清次郎様、全浦賀角井クニ様、全四日市五井隆様、全浦賀梅原エ

イ様 ○壹圓北海道富澤嬌様、全大阪増本安藝様、全矢口小林千代様、全鹿兒島柳元三之助様、全佐世保川添諦信様、全堺市寺井靜子様、全東京水野重造様、全桑名山下清太郎様、全新潟上小國高橋久治様、全三重北川藤助様、全山口河本つれ様、全大阪中川保三様、全日暮興治右衛門様、全小間場清作様、全佐野真太郎様、全小越東一様、全旭徹様

○六拾錢愛知澁川祝教場様

百々治之助

本誌定價
一部 金十錢 郵稅共
半年 金六十錢 全
一ヶ年 金一圓 全

註文の注意  
 購讀希望者は代金を添へて御申込下さい  
 誂代は總て前金御拂込の事  
 送金は振替によるのが便利  
 です

昭和五年 二月十八日印刷納本  
 昭和五年 二月二十日發 行

發行兼 編輯人 土屋 觀道

名古屋市西區隅田町二一番地 印刷人 百々治之助

電話四〇二九三番

名古屋市東區錦屋町二丁目 印刷所 山田活版印刷所

電話東(4)二六五・壹壹

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行所 眞生社

振替口座東京四七二八八番